

学校園教育推進サポート事業 報告書

学 番	1301	学校名	浜浦小学校	校長名	小林 圭一	作成者名	樋浦 教之
学校教育推進サポート担当者名		樋浦 教之				電 話	266-3181

1 実践のテーマ

自ら「かかわり」・「学びを深める」子どもの育成  
～「問い」の質的向上を通して～

2 テーマ設定の理由

昨年度は、『自ら「かかわり」・「学びを深める」子どもの育成』を研究テーマに設定し、研究に取り組んだ。子どもの姿から見取れた事実及び授業者からの意見を整理すると、昨年度までの成果と課題は以下の通りである。

【成果】

- ・授業者が本時における「学びが深まった姿」を設定し、そのための「問い」は何か、どのように子どもをかかわらせるか、という段階を設けることで授業を構想することができた。また、協議会の際にも、「授業者の想定した学びの深まりがあったか」「授業者が講じた手立てにより深い学びが実現できたか」という視点で協議を進めることができた。
- ・問いの質的な向上を目指したことで、授業実践において提案された「問いの段階的提示」「問いの焦点化」という視点が、学びの深まりに効果的であることが確認できた。

【課題】

- ・授業者の設定した問いが、子どもが本当に考えたいという問い(子どもの問い)となっていないか、問いが「学級全体」に共有されないまま、一部の子ども「問い」に止まっていたりすることがあった。
- ・協議を進める中で、「子どもがかかわることを必要としていたか」ということが話題に上がった。今年度の新潟市学習生活意識調査「授業で、ペアやグループで話し合う活動が好きです」という項目の肯定的評価が2年連続で減少していることから、子ども自らが「かかわりたい」という思いでかかわっているのではなく、授業者の指示によってかかわっているのではないかという指摘があった。

昨年度までの成果と課題から、今年度は目指す資質・能力を出発点にした「学びの深まり」を実現するために、「問いの質的向上」に焦点を当てた授業の具体について追求する。

昨年度の課題である「かかわり」についても、「問いの質的向上」によって、「かかわりたい」という子どもの意欲を喚起することが可能となる。つまり、「かかわり」は目的ではなく、深い学びを具体化するために必要な手段である。子どもが自ら「かかわりたい」という意欲をもち、深い学びへ向かう姿を問いの質的向上によって、具体化していく。

3 実践内容

(1) 実践の概要

- ・子どもが「学びを深める」ための「問い」の質的向上
- ・学びの深まりを自覚する振り返り(振り返り作文)の工夫

実践内容の様相を図示すると次のようになる。

授業前の既有知識・考え

子どもが「学びを深める」ための  
問いの質的向上

授業前の既有知識・考え

学びの深まりを自覚する振り返りの工夫  
(振り返り作文)

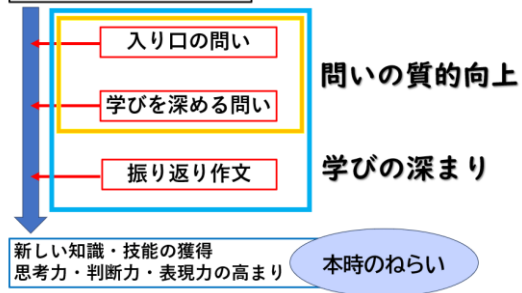
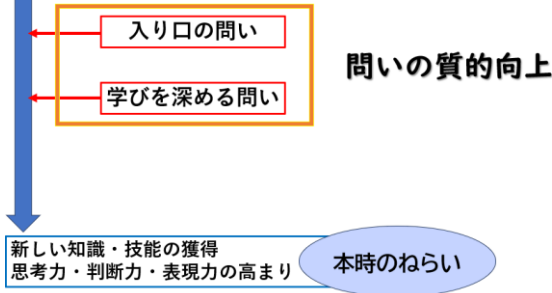


図1 「子どもが「学びを深める」ための「問い」の質的向上

図2 「学びの深まりを自覚する振り返り(振り返り作文)の工夫」

まずは、学級全員が授業に入ることができるよう子どもに「入口の問い」をもたせる。「入口の問い」とは子どもの素朴な疑問や分からなさ、困り感から生じる「問い」である。この「問い」を学級全体で共有することにより、学級全員が授業に参加し学習意欲が喚起される。一方で、「入口の問い」のままでは学びは深まらない。そこで、必要なのが「入口の問い」に続いて「学びを深める問い」を子どもがもつことである。「学びを深める問い」とは、授業のねらいや教科の本質に向かう問いである。子どもが「入口の問い」を解決し、一定の結果を得た後で、この「学びを深める問い」をもつことにより、授業者が設定した深い学びに向かうことができるようにする。

「入口の問い」や「学びを深める問い」を解決する過程においては、昨年度の研究と同様に既習事項と比較して共通点を見つけたり、自分の考えを変容させたり、新たな認識を加えたりすることが重要である。このことにより、新しい知識・技能を獲得したり、思考力・判断力・表現力の高まりといった資質・能力の向上を目指したりしていく。授業者は「入口の問い」と「学びを深める問い」を設定し、授業に臨む。また授業者は子どもがそれぞれの問いをもったり、学級全体で共有したりすることができるように具体的な手立てを講じる。

## (2) 具体的な実践内容 (令和6年11月29日 授業づくり研修会Ⅱより)

【国語】 単元名『鍵となる言葉を見つけ、謎を見破ろう』

### 子どもが学びを深める問いの質的向上

学びを深めた子どもの姿を「場面とともに変化する登場人物の心情と関係、それに関係する各場面の出来事のつながりを意識しながらミステリー作品を読むことができる」と設定して実践した単元である。

本時は「登場人物『東君』『西君』の気持ちや関係の変化を「ぼく」の推理やそれにつながる出来事(伏線)と関連付けて想像することができる」をねらいとして、2つの問いを次のように設定した。

入口の問い：「ぼく」が謎を解くことができたきっかけは何だろう。

学びを深める問い：答えに辿り着くまでに、「ぼく」が見てきたことは何だろう。

前時に視点人物「ぼく」が中心人物「東君」「西君」の心情や関係の変化について推理したことを理解した。本時は、「ぼく」の推理を理解した子どもたちが、「入口の問い」をもつことができるよう、教師は次のような働き掛けを行った。

入口の問いを引き出すための手立て：「ぼく」は何曜日に2人の秘密が分かったのかと問う。

この働き掛けに対して、子どもは火・木・金曜日と考えが分かれた。その理由について考えることを通して、子どもは入口の問いをもち、物語を再読した。子どもは、次のような発言から、金曜日に起きた出来事が「ぼく」の推理につながる伏線になっていると考えた。



金曜日に、「ぼく」はかべ新聞の裏にある汚れ(青い線)を見付けた。そして、二人に何があったのが分かってしまった。

「入り口の問い」を解決し、安定し始めた状況で、学びを深める問いを引き出すため教師は次のように働き掛けた。

学びを深める問いを引き出すための手立て：「ぼく」は証拠（青い線の汚れ）を見ただけで、2人の変化の謎が解けたのかと問う。

すると、子どもは次のような伏線があることをつぶやいた。

金曜日、東君と西君は、油性ペンを触ろうとしなかった。



そうすると火～木曜にも、まだ伏線があるね。



まだ他にも伏線があることに気付いた子どもたちは、さらに再読を進め、多くの伏線を見付けた。見付けた伏線をウェブマップでまとめ、一つ一つの伏線がつながって推理が成り立ち、さらには中心人物の心情や関係の変化につながっていることに気付くことができた。

### 学びの深まりを自覚する振り返り（振り返り作文）の工夫

これまで大切にしてきた物語の読みの観点に加えて、この時間の学習でどんな読み方をすることができたのかを振り返るよう促し、自分で選んだミステリー作品を読む上で意識したい読み方＝新たに獲得した読みの観点について記述させた。

私の読みながらやるといいと思うことは、キャラクターの特徴を読むことです。そうすると、そのキャラクターの性格が分かってきて、読むのが面白くなるからです。後は推理しながら読むことです。推理しながら読むと当たったらうれしいし、当たらなくても読むのが更に楽しくなるからです。（A児）

【算数】「かけ算(3)」～さがしてみよう つかってみよう かけ算のきまり たんけんたい～

### 子どもが学びを深める問いの質的向上

本時では、「簡単な2桁×1桁の積の求め方について、乗法の性質やきまりを用いて、九九が適用できる乗法の形に置き換えて考えることができる」ことをねらいとして、①入り口の問い、②学びを深める問いを以下のように設定した。

入り口の問い：14×3のこたえを見つけるには、どのようなきまりを使って考えるとよいだろうか。

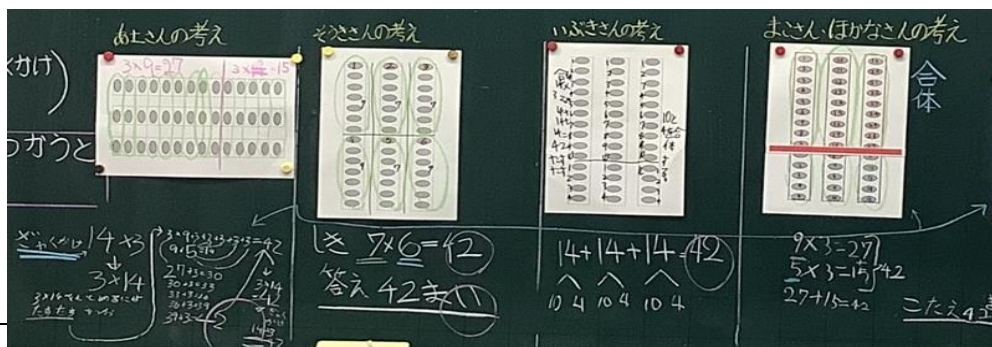
学びを深める問い：「合体」（分配法則）のきまりがつかえるときとつかえないときのちがいは何か。

本時に至るまでに子どもは、乗法を用いて日常の事象を解決すること、未習の段の乗法を既習の段の乗法を用いて再構成すること、九九表などに見られる乗法のきまりに目を向けることなどを学んできた。

子どもは本時の課題に対しても「14×3」を既習の乗法に置き換えられないかと考えた。しかし、「14×3=5×3+9×3」というように被乗数が2桁の乗法を即座に分解して考えることは難しい。そこで、次のような手立てを行った。

アレイ図付きのワークシートを用意して児童が自分の考えを整理し、解決に向けて見通しをもてるようにする。学級全体で考えを共有する際にも、アレイ図を用いて聞き手が理解しやすいようにする。

この手立てにより、アレイ図を使って、「一つ分」「いくつ分」を図にかき込んで式と対応させて考えたり、アレイ図を使って説明したりすることが出来た。

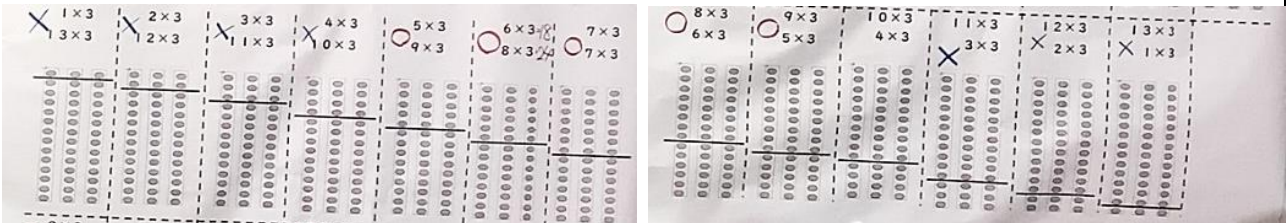


「 $14 \times 3$ 」の様々な求め方が提示されると、子どもは被乗数の14を分解して、「九九が使える場合（1位数+1位数）」と「九九が使えない場合（2位数+1位数）」があることに気が付き始めた。そこで教師が「合体のきまりをつかえるとき」と「つかえないとき」の違いを問うた。

一部の児童は「合体のきまりがつかえる被乗数の分け方」と「合体のきまりがつかえない被乗数の分け方」の違いについて理解できていたが、多くの児童はその違いについて理解していなかった。そこで次のような手立てを行い児童に働き掛けた。

被乗数14の分割方法について、「合体のきまりが使えるとき」と「使えないとき」の違いを問う

この手立てにより、きまりが使えるときと使えないときが可視化され、14を「8」と「6」のように九九が使えるように分割しなければいけないことを理解することができた。



#### 学びの深まりを自覚する振り返り（振り返り作文）の工夫

①今日学習したこと、②問題の解決について大切だったこと、③感想の3文でまとめさせ、1時間や単元の児童の学習が見取れるようにする。

2けたの時は、きまりを使うとよいことが分かりました。

合体がよいときとだめなときのちがいは、九九ひょうにのっていない2けたのかけ算になっているかどうかだということです。(B児)

#### 4 実践計画

実施時期	実施内容（研修会、先進校視察、授業公開 等）
9月	授業づくり研修会Ⅰ 学校支援課指導主事を招いて公開授業・授業協議会 ※ 対象は浜浦小の職員のみ ※国語・算数 各1授業
12月	授業づくり研修会Ⅱ 学校支援課指導主事を招いての公開授業・授業協議会 講師（関西大学初等部 教諭 尾崎正彦 様）を招いての講演会 ※ 校外からの参会者を募る。※国語・算数 各1授業

#### 5 成果（○）と課題（▲）

○ 「入りの問い」と「学びを深める問い」を設定したことにより、子どもと授業内容を共有しながら本時のねらいに迫ることができた（職員、及び参会者のアンケートより）

○ 『新潟市生活・学習意識調査』により各教科に対する関心度の項目が向上した。

▲ 教師による働き掛けにより、子どもは「問い」をもったり、活動を始めたりする姿が見られた。『新潟市生活・学習意識調査』では「授業で、ペアやグループで話し合う活動は好きです」という項目において、「そう思う」という割合は新潟市の数値の平均を下回った。学習者である子ども自身が「解決したい」という「問い」を自らもったり、必要感をもった話し合い活動に取り組んだりする姿を見ることができるよう、今後も授業研究を進めていく。